

会員だより

小学校76期 原文人



私は追手門学院小学部の卒業生であることをいつも誇りにしている。もともと弱虫だった私は、小学部5年生のときから教わった理科の佐川博先生によってその後の生涯を変えるくらいの影響を受けた。この先生は、私が持っていた疑問について何でも丁寧に教えてくださった。そしていつも何か聞くと同時に関連した調べ物の宿題が出て、私は何よりもこの宿題をするのが好きだった。するとまた疑問が出てきて、未知の世界はどんどん広がっていった。その後理科から始まって、物理、化学、天文学、地球学とひろがり同時に地図が好きになり、地理、歴史、考古学とどまるどころを知らぬ好奇心が広がった。そしてもっと大切なことは、佐川先生から、好きなことは限りなく追求し、正しいと思ったことは曲げてはいけないということを知った。中学は追手門学院に進むものとおもっていたが、頭を丸坊主にしなければならないので断念した。そして大阪で唯一校だけ、長髪を許していた市立船場中学に入った。ところが運悪く、同時期に赴任した安田新校長が、船場も今年からは丸刈りにすると宣言した。ここからは、学校との抵抗の始まりだった。先生からは不良呼ばわりされるし、長髪のままがんばろうと誓ったはずの仲間も次々と丸刈りにしていく。2学期になると、1年では唯一人になってしまった。運良くドイツからの赴任を終えて帰ってきた商社マンの子供が編入してきて彼は当然のことながら長髪なので、絶対に抵抗しようとして見えたものの、先生方の強い説得にあったのか数週間うちに丸刈りとなった。私の長髪はますます目立ち、先生からは「植木鉢」などというひどいニックネームをつけられた。いじめているつもりなかもしれないが、こちらはレジスタンスのつもりでがんばっているのでびくともこない。親に聞いても、私が説明するとよくわかってきて、決して先生の言うとおりにしなさいとは言わない。之が一番ありがたかった。その後長髪が不良ならば、それで結構。その代わり勉強は一番をとってやると決意。中2のときだったと思うが、父が欧州から帰ったので、「どこから帰ってきたの?」と聞く。「スオミからだ。」という。地理の時間にそんな国は聞いたことがない。そこで「それは、どこにあるのですか?」と父に聞く。「スオミとはフィンランドのことだよ。」と答えが返ってきた。「なぜスオミってぶよの?」と父とく、「フィンランドは、英語の呼び方だ。地元の人々は、スオミって自分の国のことと呼んでいるのだよ。お前だって、日本のことをジャパニとはよばず、にっぽんと呼ぶだろう。」と返事した。この一言が、私の疑問を沸かした。学校で習っているのはひょっとしたら其の国の人が自国を呼んでいる名前と異なる名称を習っているのかもしれない。

整理してみると、イギリス、ドイツなどは、日本語による国名だし、スウェーデン、ノルウェイなど多くは英語の国名だ。調べていくとオーストリアなどは、現地の人々は、エスタライヒと呼んでるし、ポーランドだってボルスカだ。全部調べて、地理の試験に現地風の国名を書いてみた。先生は、事情を聞かれたが、高校入試のときは、絶対に現地風の名前を書くなどと言いながら高く評価してくれた。長髪の私は、生徒手帳にある校則の中で、正しいと思えないものは片っ端から破った。其の姿勢が本物のワルに受けたのかずいぶん多くの友人が私の周囲にたむろした。勉強だけではいかん。文武両道だと感じて後に空手を始めるきっかけとなった。先生たちの見る目も3年になるとすっかり代わった。自分流を誰も許すようになった。学生時代は、勉強もしたがそれ以上に遊んだ。ほんとに楽しかった。

若い間にできるだけおいたらよいと思うことは、失敗の経験だ。学生時代、そして20代、30代といった若い間は、思いっきり挑戦して、燃焼してそれで失敗するならそれでよし。考えぬいて、そのときできる限りの準備をして、そして思いっきりやっつてその結果失敗したとすれば、その結果学ぶことは大きい。失敗を経験するのとはしないのではその後の人生のおもしろさは大きく異なる。人間の将来は計算して作れるものではない。いくら賢く考えて最短距離で人生を計画し、学校を選び、資格を取り、職業を選んでも、生きていて本当によかったと思えるような人生にならないものだ。学生時代に考えることは、たいしたことではないかもしれない、本当にしたいことが見つけれずにあがいているのが学生ともいえる。それでもわずかに見つけたきっかけを迷わず突き進むのが若さであり、そこから始めた経験が、視野を広め、それが元になって考えさせられ、さらに行動し前へ進んでいくものだ。迷っていたら行動せよ。そうすれば道は開ける。

もし、何をしたいのかわからないのならば、学生のうちに世界の発展途上国の中からアフリカ、

アジア、南アメリカのうち合わせて10カ国くらいを選び一年かけて旅に出ることを勧める。私は学生時代、途上国で考古学研究をめざした経験があるが、自分が安全に生きていくためにはさまざまな工夫をした。日本にいる時と同じ感覚でいると、伝染病にもかかるだろうし、事故にも会うだろうし、強盗や事件にも遭遇する。自分で自分を守るために、世界の人々はどうしているかを否が応でも体得することができる。それから貧乏という言葉も、不潔という言葉も、文字で学ぶのではなく肌で感じ、何がおきても冷静にそのときの判断ができるようになっていくことを経験できる。その結果、ものごとを受け入れる許容量が広がり、少々のことでは、切れたり、ひどく沈み込んだりしない人間性の幅が出来上がってくる。途上国の経験ほど失敗から学ばせてくれるところことはない。人間の一生は本当に何が待っているのかわからない。人の一生の節目で、妥協した人間にはそれだけの人生が待っている。その結果、一見地位肩書きを手に入れて羨ましそうに見える大人たちが本当に幸福でない場合も多い、無名ながらも豊かな人生を送る人も多い。人の将来なんて誰もわからない。ただし、生きる姿勢は持っていたほうが、楽しく豊かな人生を送ることができる。さあ、若いうちに失敗の経験をつんで、決断力を身につけ思い切り人生を楽しもう。

もう日本を離れて30年になる。お金ももたったら幸せになれると人々を信じ込ませるところに、アメリカンドリーム流の幸福の定義の問題点がある。私は職業柄、アメリカで、いくつもの公開企業を生み出し、その創業者、従業員を最低でも数百人を億万長者にしてきたが、百億円以上のお金を作った人たちが本当に幸せになった人はほとんどないという事実を知っておくほうがよい。お金は、多くの場合人を変える。お金がないときには、お金があれば、これも買える、あれもできると夢は膨らむが、お金持ちになってみると、モノでは自分は満たされないことに気づく。シリコンバレーでもベンチャーを当てて急にお金持ちになった人が、ほしかった欧州車を何台も買い、プールのついた大きな家を買う。中には宮殿のように大きな家を買うものもあるが、家など、ある程度の規模より大きいとやって居心地が悪い。おいしいものもたまたま食べるから、楽しいこともたまにできるからうれしく特別なのであり、特別なことが日常になると人間は感動を忘れてしまう。

もう一度何が幸せであり、人生の目標にすべきかを考え直す時期に来ている。アメリカの社会では、いかに株価を高めた経営者、すなわち、企業価値(時価総額)を大きくした経営者がもてはやされるが、こうした考えは人間が本来求める幸せの追求とは無縁のものである。惑わされてはいけない。しかも、いい製品を作るとか、優れたサービスを行うとかといった企業目標は、ROE(資本収益率)の効率を求める企業目標の後ろに隠れて、お題目化しつつある。ただ一国だけ、または一社だけわが道を行こうとしても会計基準、資本のグローバル化の下にあがいてもつぶされるだけだ。行き着くところまで資本主義も流れやがて、次の新しいの価値観を求める時代へと激しく変化していく。企業資本主義の中身が、資本の効率だけを最大限追求ようになっていくと、いい製品や、優れたサービスは退化せざるを得ない。このためにも、やはり「会社は株主のものだ。」といった考えの資本主義の流儀を改めなければならない。いまや人々が生きるべき価値観、企業が従うべき価値基準をよく考えて、再構築しないことには、われわれの社会は押し流されて崩れかねない。

人々は、この世に生を受け、父母の恵み恩師の導きを経て成長しやがて社会に出て天職を授けられる。そして、幸せを求めて生きる。お金がないと惨めなのは、万人の知るところである。しかしお金がありすぎて不幸となることはわかりがたいことだ。そして経験してみても取り返しのつかない事態になっていることが多い。20世紀になって体制が資本主義に移行したときに社会のお金に対する行動原理が大きく変わったように、ポスト資本主義の社会に、また大きく変化する。近い将来に、革命的な機運がきっかけとなって世界人類は新しい時代に到達する。その時に備えて、米国型の価値観、価値基準の判断の行き詰まりを打開できるような価値判断の基準をわが国から世界に発信していくことができたらどんなによいだろうか。その時初めて、日本が本当に世界で必要とされるようになるのだ。今年からその一環として、わが国の中にあって世界に知られるべき価値基準の判断を示す論説を見つけ、欧米で多くの人々に読んでもらえる事業を始める。皆様方にも、力を貸してほしい。

原 丈人が大阪を出てからの歩み

原文人は、学生時代は中央アメリカの考古学の研究者をめざし、卒業後もエルサルバドル、グアテマラなどへ行って研究を続けました。26歳のときにさらに考古学研究を続けるための資金を作るにはビジネスと英語を学ぶべきだと考えからスタンフォード大学のビジネススクールMBAコースに入りました。そこで知ったベンチャーキャピタルという仕事に引かれこの仕事をするには、事業を自ら起こして経営する経験が大切との助言を受けたことから、自ら光ファイバー・ディスプレイシステムの開発メーカーを創業することになりました。そのために、スタンフォード工学部大学院に移籍し在学中に自らの事業を起こしました。はじめは危うかった事業もスタンフォードの学生事業家として80年代前半アメリカの各誌に取り上げられるくらい大成功を取めることができました。1984年からは、ベンチャーキャピタル事業持株会社を創業し、85-95年代のシリコンバレーを代表する100社のIT関連ベンチャー(例えば、パソコンソフト分野で世界第3位となったポーランド社や、DVDチップで最大手となったゾーラン社など)のうち10%は、原氏が創業株主または取締役であるというくらい大きく米国の経済に貢献しました。95年からはコンピュータのないIT社会を完成させるためのIT企業を世界中で創業しています。こうした活動から、2003年にアメリカ合衆国の共和党全国委員会からビジネス・リーダーシップ・アワードを受賞し同時に、米財界団体のビジネス・アドバイザー・カウンセルの名誉共同議長に任命されブッシュ大統領のもとで就任式典が行われました。さらに先進国の援助資金を使わず民間だけの仕掛けで発展途上国の情報通信インフラを作って行く仕組みの提言を、2003年12月の国連世界情報社会サミット・ジュネーブ総会の発展途上国部会議長として行いました。追手門の学生・卒業生には、原氏が議長を務める国際会議には、関心のあるものはみんなボランティアとして参加できるような仕組みを国連テクノロジー・テレコム会議、ラテンアメリカ諸国会議、中国情報通信会議などに対して呼びかけていますので、奮って参加してください。

経歴

デファ・パートナーズ事業持株会社グループ会長
欧米で活躍する日本人実業家、75年度大卒、中米考古学の研究を経て81年スタンフォード大学院工学修士。光ファイバー事業で成功を取り、85年からポーランド、オーパス(インテルと合併)など数十社の先端技術分野の事業を数多く立ち上げた。デファ・パートナーズは、現在サンフランシスコ、東京、ロンドン、テルアビブ、ソウルに拠点がある。
現在、国連Wafunif大使、米共和党ビジネスアドバイザー・カウンシル名誉共同会長、日本政府産業構造審議会委員、東京財団理事、原財団理事、など職務。